



TITLE:

支那馬(水滸傳の地理、二)

AUTHOR(S):

如舟老人

---

CITATION:

如舟老人. 支那馬(水滸傳の地理、二). 地球 1925, 3(4): 470-471

ISSUE DATE:

1925-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182846>

RIGHT:

談叢

支那馬

(水滸傳の地理、二)

如舟老人

水滸傳の第一回史家村の様子は前回に述べたが、こゝへ少華山の山賊の頭領陳達が來た時に坐騎一匹高頭白馬、手中横着丈八點鋼矛といふ文句がある。之に對する史進は「火炭赤馬」に乗つて出る。

第四回小霸王醉入銷金帳、花和尚大鬧桃花村の章に桃花山の頭領小霸王周通が劉太公の家に押掛け婿に來る時に乗つた馬も

騎一匹高頭捲毛大白馬とある。

此等の記事を読み、又た白馬銀鞍といふ様な唐詩の句などを考ふれば、如何にも立派な名馬らしく我々には感ぜられる。が支那に行つてみると此の想像は全く間違つてゐることが發見さ

れる。日本や朝鮮には白馬の珍らしく、此頃日清日露兩役等から多くなつても栗毛、黒馬等よりは遙かに少いのを反して、支那では驢騾には白毛がないのに反して、馬は十中八九まで白いのが多いのである。

明治三十五年十月熱河及び多倫諾爾を旅行した時に所謂秋高く馬肥えた季節であつたので、蒙古牧場から馬群を驅つて張家口その他の馬市へ出るものに出逢つたが、何れも白馬が多く、張家口で一匹乘馬を買ふに當つて白馬では面白くないと思つて栗毛を搜して買つた経験がある。

但し此處に斷つて置かねばならぬのは水滸傳第五十九回に金毛犬段景住が鎗竿嶺といふ處から盗んで來て、梁山泊に至る間に凌州の西南曾頭市で曾家の五虎(五人兄弟)に取られてた名馬炤夜玉獅子馬のことである。これは

雪練也似價白、渾身並無一根雜毛。頭至尾長一丈、蹄至脊高八尺、那馬一日能行千里、北方有名、喚做炤夜玉獅子馬、乃是大金王子騎坐的

といふもので、白馬ではあるが普通の支那馬でなく、遙かに支那馬よりは脊の高い中央亞細亞の伊犁種と推察される。此の如き首の長く頭の小さくて四肢の遅くて長い白馬は稀に北京などにも來てゐた。又たコサツク兵から日本軍に俘捕されたものにも之に類似した大馬があつて、その蹄鐵の大きさが七八寸に達するものも見たことがある。故に此の如き白い名馬は例外である。

日本人は一般に馬の良否を鑑識する眼がなく、支那に行くまでは我々も競馬場で見ると細長い出足の早いのが駿馬かと思つたが、北京で清室八駿の一といふ栗毛の支那馬を見て初めて名馬といふものは全形の四角張つた骨の太く筋力の逞ましいものなるを知つた。今奉天にゐる町野君が其頃中尉で熱河赤峰圍場の方面に同行されたが、この馬に乗つて來られて、到る處の寒村の子供が我々外國人を見物に集つて此の馬に見惚れて唾を流して「好馬」を連呼するので眼識あるのに驚いた。町野君はこの馬で歸途一晝夜

三百里を疾驅されて所謂千里の馬の名の空からざるを知つた。

その後山東で所謂瘦金體の書風の南宋高宗帝題字と想れる韓幹鞍馬圖なるものを觀て、その筋骨が如何にもこの駿馬そのまゝなるに惚れ込んで買ひ求めた。敢て伯樂を自負した譯でなくて何人もこの名馬を貌した畫家の眞趣を解するものがないのに憤慨したに過ぎなんだ。

此の如き手前味噌は如何でもよいが、漢文に出る白馬といふ概念は決して普通に聯想さるゝ如く非常に珍らしい名馬ではなく、支那では何處でも見る尋常一般の馬たるに過ぎないものたることを知らねばならぬ。此の如くして初めて白馬馬に非ざる論などの詭辯として面白い處が分つて來ると想はれる。若しそれが我々の考へる如く珍らしい馬が馬でないといふのでは餘り強くは響かぬのである。又た従つて山賊の乗つて來たのは普通の馬の稍立派なものたるに過ぎぬことも自然理解される。